

旧石器捏造 10年

下

「日本では考古学者と自然科学者の議論が成り立っていない。新井宏・慶尚大(韓国)元招聘教授(金属考古学)は、ため息をついた。手にした米国の放射性炭素研究誌「ラジオ・カーボン」では、古代エジプトでレンガに混ぜた草やワラの放射性炭素年代測定結果と考古学者が主張する年代のずれを巡り、長い論争が繰り広げられている。新井氏は金属メーカーを退職後、理系の立場から考古学に問題提起する論文を精力的に発表している。だが、「考古学者は批判に対して反証で応えようとしない」。

旧石器捏造事件の当時、考古学者が捏造を見抜けなかった理由として自然科学との連携不足が指摘された。

人類の進化は従来、世界各地で原人や旧人が、それぞれの地域で進化して現在に至ったと考えられてきた(多地域進化説)。しかし1990年代後半以降、アフリカで約20万年前に誕生した現生人類(新人)が世界に広がったとする単一起源説が主流になっていく。この説に従えば、人類が日本に到達したのは約4万年

理系教育を欠く考古学者

前。捏造発覚前に、日本列島の人類の起源が約70万年前にさかのぼると考古学者に受け入れられてきた背景には、多地域進化説の強い「刷り込み」があった。

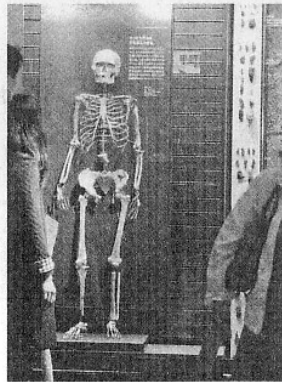
日本旧石器学会長の小野昭・明治大特任教授は「捏造発覚で約4万年前以前の遺跡が全部ダメになり、ようやく世界的な人類拡散を頭に入れた議論ができるようになった」と振り返る。

ただ、自然科学者からの視線は今も厳しい。国立科学博物館の馬場悠男・名誉研究員(人類形態進化学)は「考古学者を育てる教育体系が問題だ」と指摘する。日本の大学では、考古学は歴史教育の一部として文学部に属するケースがほとんど。だが、欧米では、旧石器研究は人類史研究として

位置付けられ、研究者養成の過程で人骨や地質など理系の知識も身に着けるとになる。発覚前から捏造の可能性を指摘していた岡俊樹・国学院大兼任講師(先史考古学)も、フランスのように科学的観察に基づいた石器分析を行う必要性を訴え続けている。

「知らないことや、都の悪い測定結果に目をつる」「わかりやすいデミーに飛びつく」――考古学・自然科学を問わず多くの研究者が挙げた、考古学の弱点だ。報道に携わるマスマミも含め、今後も肝に銘べき捏造事件の教訓と言

よう。(清岡由)



旧石器人骨と石器が並ぶ国立科学博物館の展示。考古学と自然科学の連携は不可欠だ

よみうり抄

◆特別講演会「アウグストゥスの別荘？」 7日午後2時・中近東文化センター(東京都三鷹市)。東京大が2002年から発掘調査しているイタリアのソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡について、ローマ考古学者の青柳正規・国立西洋美術館長が講演。先着150人、参加費1000円。申し込み